



## 静物 / 死せる自然

大谷 正夫 (協同総研顧問)

数年前、イタリアのポローニャで絵の展覧会に入ったことがある。静物画が主であったが、そこには「死せる自然」との説明がついていた。

死せる自然 (Natura Morta) とは、どういう意味かさっぱり分からなかった。そこで、展示場の守衛氏にこのことを尋ねてみた。しかし、彼も答えられず、しばらく彼が責任者に聞いて来るまで待つことになった。答えはやはり分からないとのことであった。

今になって考えてみれば、こちらが何を質問したのか、きちんと伝わらなかったことは間違いない。

後から辞書で調べてみたら、静物画とあるではないか。静物という言葉は、我々は皆知っているが、死せる自然などという表現は馴染みのないものであった。

しかしそれでは、静物とはどこから来た言葉なのか興味がわいてきた。

その後、東京で幾つかの展覧会をめぐるうちに、静物画を中心とするものに数多く出くわした。あるイギリス人の絵画展で、静物画とした日本語の説明の横には Still Life と表記してあった。「静かなる生命」とも訳せるこの英語が、静物の元ではないかと思えるのである。

静かな生命と死せる自然では、その語感にはかなり異なった響きがある。

死せる生命では、あまりにも直接的な表現で、画題になるのかと訝しくなるほど、生命の無常を感じさせ過ぎる。

調べてみると、ラテン系では死せる自然とよび、アングロサクソンその他は静かな生命と呼んでいるようである。

静物画が絵画のジャンルとして確立されたのも、イタリアが歴史上先鞭をつけたようである。絵の専門家の話によると、宗教画の中に描かれていた草花や、その他自然のものを独立して描いたものが静物画なのだそうだ。

また彼に言わせれば、死せる自然という表現は、正に的を射てもいるというのである。

静物画には何も草花や果物ばかりでなく、食卓にこれから並ぶであろう料理の材料となる、仕留められた鳥や魚や動物も描かれることが多かったそうである。

勿論、もともと宗教画から派生した手法だけに、草花や食材の動物の絵には、諸行無常のモチーフがこめられているという。

さてそれにしても、日本的に考えると、通常に描かれる果物や草花は、みずみずしく、とても死んでいるものをわざわざ描いているとはとらえにくいのである。

だからやはり Still Life と呼ぶ方が好みである。

とある日、荻須高德画伯の作品展覧会を鑑賞したが、その中の「花」と題された絵に引き付けられた。それは普通の静物画と違って、花瓶に盛られた花々はすっかり萎れきって頭をたれていたのである。

これこそ正に死せる自然と呼ぶに相応しいと思った。